近代における雁木通りの整備過程と衰退過程

THE ARRANGEMENT PROCESS AND DISAPPEARANCE PROCESS OF THE GANGI ARCADE IN THE MODERN AGES

菅原 邦生*, 波多野 純**
Kunio SUGAHARA and Jun HATANO

A Study on the Arrangement process and Disappearance process of the *Gangi* Arcade in the Modern Ages.

1. In the early part of the Meiji Era the *Gangi* Arcade were arranged under various instructions from the prefectural governments that aimed at securing the alley function. Arrangement process of the *Gangi* Arcade had two types.
 - ① In the early part of the Meiji Era the *Gangi* Arcade were arranged in public land.
 - ② The *Gangi* Arcade had been arranged in private land since then.
2. The *Gangi* Arcade waned or disappeared. It was the following reasons.
 - ① Conflagrations (Aomori, Hachinohe, Niigata),
 - ② The urban planning after the Second World War (Hiroasaki).

keywords: *Gangi*, *Gangi* arcade, *Komise*, *Modern*
雁木, 雁木通り, 小店, 近代

I. はじめに

雁木通りは、深雪地域における歩行者用の通路であり、雁木を設けた町家が連続することで形成される。

前稿¹⁾においては、近世における雁木通りの建設整備過程について検討し、以下の点を明らかにした。

雁木通りの建設が確認できる最初の例は、元和3年(1617)～8年の長岡であり、その後、各地に建設された。

雁木通りの成立過程には、二つの事例が指摘できる。

- ①城下町建設と同時期に、雁木通りが建設された場合には、藩命により、屋敷地に政策的に建設された(長岡の表町・上田町)。
- ②城下町建設後に雁木通りが建設された場合には、道路上に建設された(長岡の裏町、高田など)。これは、城下町建設後では、屋敷地に雁木を建設するのが困難なためである。さらに、道路上に建設された雁木通りのうち、後年雁木下が私有地化した例(高田)がある。これは、雁木下の町人による占有化を藩が追認したものである。

雁木の形式には、落し式と造り込み式があり、当初の形式は落し式であったが、後年、雁木下の私有地化にともない、雁木部分における、厨子二階あるいは二階の建設により、造り込み式雁木が建設された(高田)。

近代においては、通路機能の確保を目的に、雁木の囲い込みが撤

去され、さらに雁木下が舗装された。戦後、画一的な都市計画や防火の観点から、雁木通りは衰退消滅したとされるが、具体的な検討には至っていない。

本稿では、近代における雁木通りの整備過程と、その後の衰退過程について、弘前・青森・八戸・新潟・長岡・高田・糸魚川を事例²⁾に検討する。

近代の行政文書³⁾には、「庇(青森・新潟・糸魚川)、檐(青森・新潟)、廂(弘前)、軒下(弘前・青森・新潟)、小見世(青森)、小店(青森)」の呼称が確認できる。これらの呼称は、近世においても用いられた場合が多く⁴⁾、いずれも雁木と同義である。とくに新潟と青森では、指示の内容によって、雁木の呼称が使い分けられた。たとえば新潟では、雁木そのものを対象とした場合は「庇」あるいは「檐」を用い、檐は雁木の屋根を指していた。また市中全般の生活改善を目的とし、その中で雁木についても取りあつかう場合は、「軒下」を用いた。さらに青森でも、同様の傾向が見られる。

II. 各都市における雁木通りの整備過程と衰退過程

1) 弘前における小店の整備と利用

弘前は、明治4年(1871)7月に津軽藩が廃藩となり、同年9月23日に県庁が青森に移転したことにより、商工業が衰退し、近代化が遅れた。実際に近代的な都市整備が開始されたのは、鉄道が開通し、

* 日本工業大学工学部建築学科 大学院生・工修

** 日本工業大学工学部建築学科 教授・工博

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Nippon Institute of Technology, M. Eng.
Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Nippon Institute of Technology, Dr. Eng.

第八師団が設置された明治20年代後半である⁵⁾。明治22年(1889)4月には、市制を施行した。

①小店の便所の撤去 明治5年(1872)2月10日に、『陋習ヲ洗脱可致旨、左之通相達候事』との布達⁶⁾があった。同布達には、

軒下二不浄場ヲ設クヘカラス

とある。さらに、同年9月の布令⁷⁾においても、小店の便所の撤去を再度指示している。同布令には、「文明ノ日ニ當リ、他府県ニハ曾テ無之辺鄙ノ陋習、実ニ恥ズベキ事」とある。小店に設けられた便所は、悪習として、撤去が指示され、邏卒を町に巡回させ、指導徹底がされた⁸⁾。

②小店の利用 明治24年(1891)に、土手町西側に開店した「角み呉服店」の、古写真にみると(図-1)⁹⁾、3階建の洋風建築で、主屋前面には、落し式の小店が設けられている。小店と道路の境にはガラス戸が建込まれており、小店下は店舗空間として、利用されていたものと考えられる。

図-1 「角み呉服店」

土手町西側は、明治27年(1894)の、弘前-青森間の鉄道開通により、町の北側に停車場が設置され、さらに、第八師団の、将校用官舎、貸家が、町の東側の富田に建設されたことから¹⁰⁾、人々が集まり購買力が増大したため、明治20年代後半以降、商業地域として急速に発展した¹¹⁾。土手町西側の、小店下の利用は、商業活動の活発化にともない、店舗空間の拡大を必要としたためであろう。

④小店の通路機能の確保と普及 明治40年(1907)7月7日付「弘前新聞」¹²⁾には、

土手町に入れば、両側の廂自由に通られる様に造られてあるので頗る便利である

とある。土手町においては、小店は店舗空間として利用されながらも、通路機能が保たれていたものと考えられる。

さらに、大正5年(1916)の『青森県弘前市俯瞰地図』¹³⁾には、市内の、道路に沿った商店とその店先が、鳥瞰的に描かれ、落し式の小店が町に普及している様子が分る。

⑤小店通りの衰退と消滅 その後、弘前的小店通りは、戦後の都市計画により衰退した。都市計画が本格化したのは、昭和38年(1963)であり¹⁴⁾、昭和47年(1972)の『弘前市都市計画図』¹⁵⁾によれば、拡幅予定の道路は、明治時代末期から大正時代初期にかけて小店通りが設けられていた地域¹⁶⁾とほぼ一致する。また、拡幅に際しては、小店下の一部あるいは全部を道路とすることで、道幅を拡幅した¹⁷⁾。よって都市計画にともなう道路拡幅により、小店通りが衰退したと考えられる。

以上のように弘前においては、明治5年(1872)に小店の便所の撤去が指示され、小店が整備された。明治時代中頃には、商業活動の活発化にともない、小店柱にガラス戸を取付け、小店を店舗空間として利用する傾向が強まった。その後、弘前的小店通りは、戦後の都市計画にともなう道路拡幅により、衰退した。

2) 青森における小店通りの整備と幅員制限

青森は、北海道開拓のための開拓移住者の渡航地であった¹⁸⁾。そのため船舶の往来が頻繁となり、明治3年(1870)には近代的な都

市整備が開始された¹⁹⁾。明治4年(1871)には、県庁所在地となり、明治31年(1898)4月に、市制を施行した²⁰⁾。

①小店の整備 明治5年(1872)2月13日の『村井旧記』²¹⁾には、

追々馬車人力車等相用ふはずにつき、道路は勿論軒下等まで砂礫を敷入れ高低なきよう受前限り追々手入れ致させ

とあり、小店は、公道と同等の通路機能が求められた。さらに、同記録には、

軒下に不浄場を設くべからず

とある。これらの整備の目的は、都市整備の本格化に際し、悪習とされた小店の便所を撤去することにある²²⁾。

明治5年(1872)5月21日発行『青森実地明細絵図』²³⁾には、商店とその店先が、鳥瞰図として描かれ、落し式の小店が普及している。

②小店の幅員制限と景観 明治6年(1873)5月5日の『五月五日青森町小地下牛馬往来ノ儀ニ付布令候事』²⁴⁾には、

五月五日青森町小地下牛馬往来ノ儀ニ付布令候事

(中略)

當町ノ如ク牛馬ヲ牽キ人行ノ妨碍ヲナシ候處ハ、他二其比類アルヲ見ス、且已前ノ如ク板或ハ藁等ニテ取囲ヒ候テハ、大ニ市廛ノ觀光ヲ損シ行末當町不繁榮ノ地ニ相成

とあり、明治6年(1873)には、牛馬が小店を往来し、人々の往来の妨げとなっていた。さらに、小店を板・むしろなどで囲うことは、景観上好ましくないとする方針が示された。さらに、

今後新作家ノ者共ハ、小店三尺ヲ限り造作致シ

とあり、新築の場合の小店の幅員を、3尺に制限した。また、小店先には、むしろ・あし・すのこなどを設けず、暖簾、障子を用いることとされた²⁵⁾。

同年7月の「七月欠日當市中取締方之儀、是迄追々布令二及置候處、今般邏卒ヲ置キ、尚又取締致候ニ付、左之條々堅ク相守可申事」²⁶⁾には、

牛馬ヲ牽キ市中櫓下ヲ通行スヘカラサル事

とあり、小店の牛馬の往来を禁じた。さらに、

市中往来左右之溝ヨリ前へ庇ヲ出ス間敷事

とあり、道路上への小店の張り出しを禁じた(図-2)。また、同月の記録²⁷⁾によれば、道路上に張り出した小店は、その家主に取り払わせた。

町東端の塩町の明治9年(1876)の古写真²⁸⁾(図-3)によれば、落し式の小店が確認でき、その屋根は石置板葺である。また、小店が溝より前の道路上にはみ出していないことから、指示は、守られていたことが分る。

図-2 小店の道路上への張り出し

図-3 明治9年(1876)の塩町の小店

③小店通りの衰退と消滅 青森は、明治43年(1910)5月3日の大火により、ほとんどの小店通りが焼失した²⁹⁾。青森県知事武田千代三郎は、大火後の防火対策として、同年5月17日に、青森市建築取締規則を発布した³⁰⁾。同規則の第19条には、

店頭には小見世を設くべからず、但し一定の区域内に於て各戸同一の構造に依り不燃物質を以て之を建設せんとする時は特に之を許可することあるべし

とあり、小店の建設を原則的に禁止している。ただし、統一して不燃材で作る場合には許可されることもあった。それを受けて、同年、青森市長工藤卓爾は、市債40万円を投じて実際の復旧を行った³¹⁾。同対策の事業計画の中には³²⁾、

本市の道路幅は、縦町通りは浜町に限り十二間其他は八間、横町通りは六間で、しかも従来小店敷地として両側三尺つゝ使用せしめていたのを、火災後は全部道路敷と改め、両側に雨水排水溝を改修

とある。「従来小店敷地として両側三尺つゝ使用せしめ」とあることから、小店は、大火以前において、公有地である道路上に建設されていた。

明治43年(1910)の大火後には、米町などにおいて、小店の屋根を瓦葺とするなど、不燃材を用いて小店が復興された³³⁾。復興された小店通りは、戦災(昭和20年・1945)により消滅した³⁴⁾。

以上のように青森においては、明治5年(1872)に、小店は、公道と同等の機能が求められた。その後、明治43年(1910)の大火により、ほとんどの小店通りが焼失した。大火後、小店通りの一部は不燃材で復興されたが、戦災により消滅した。また明治43年(1910)の記録によれば、小店は、公有地である道路上に建設されていた。

3) 八戸における落し式の小店通り

八戸は、明治24年(1891)の東北本線の開通、大正13年(1924)の八戸線の開通により、海岸部の町村と関係を深め、昭和4年(1929)に海岸部の小中野町・湊町・鮫村などの町村を合併し、市制を施行した³⁵⁾。

①明治期的小店通りの景観 八戸は、明治20年代の表町の古写真³⁶⁾(図-4)によれば、板葺の落し式の小店が設けられていた。小店の前には幅広の水路があり、小店と道路の間は、板橋で繋がれていた。さらに、明治40年代の表町の古写真³⁷⁾によれば、小店先には、かけ障子・戸障子が設けられていた。このかけ障子は、「しとみ」・「しとめ」と呼称された³⁸⁾。

②大正期的小店通りの景観 大正10年代の裏町(六日町)の古写真³⁹⁾によれば、魚屋の小店には、売台が置かれ、商品売買の場としても利用されていた。

図-4 明治20年代の表町の小店

その後、八戸の小店通りは、大正13年(1924)の大火によりほとんどが焼失した。昭和初期の表町の十三日町の写真⁴⁰⁾によれば、町家前面の小店は失われ、二階屋前面は、軒の出の浅い庇に変わっている。さらに焼失を免れた小店通りも、昭和30年(1955)までに消滅した⁴¹⁾。

以上のように八戸においては、明治・大正時代において、落し式の小店通りが設けられ、小店先には、かけ障子が設けられていた。その後、大正13年(1924)の大火により小店通りのほとんどが焼失し、焼失を免れた小店通りも、昭和30年(1955)までに消滅した。

4) 新潟における雁木の障害物の撤去と権利形態

新潟は、安政5年(1858)の日米通商条約によって、開港される五港の一つに定められた。明治元年(1868)には、民政局が設置され、明治2年(1869)10月に開港した⁴²⁾。

明治5年(1872)には、楠本正隆が新潟県令として着任し、殖産興業・文明開化・町村行政改革などととも、都市整備を開始した⁴³⁾。明治22年(1889)には、市制を施行した。

①公道としての雁木通り 『改革叢書』⁴⁴⁾ 明治5年(1872)9月3日の「市中底下道敷之内ト可相心得之事」には、

市中底下之儀、一般道敷ノ内ト可相心得事

但、底下之儀ハ従前之通可成丈往来之妨害不相成様致シ、別テ掃除不怠様心付可申事

とあり、雁木は、公道と同等の通路機能が求められた。

②雁木の障害物の撤去と補修 楠本県令の新潟改革のひとつに道路整備がある。道路の改修工事を実施されたが、着任早々に問題にしたのは、路上に物が置いてあることである⁴⁵⁾。

『改革叢書』明治5年(1872)7月の「市中心得書並教諭文同和解」には、

町家ニ於テハ毎日路々之軒下ヲ、朝ハ五ツ時迄ニ夕ハ七ツ時迄ニ必掃除致シ

とあり、雁木を清潔に保つように指示した。さらに同記録には、

五区内軒前ノ小便所ヲ毀ツ事

是迄軒前見世前ニ小便所取設ケ有之、見苦敷儀ニ付今度五区内不残取毀チ、更ニ銘々之裏向工取設申付候事

とある。「五区内」とは、新潟町内のほぼ全域を指す。雁木には、小便所が設けられるなど、好ましい状態ではなく、その撤去を行政が指示した。同記録の「教諭文」⁴⁶⁾によれば、政府の外交政策に沿って、外国人に恥ずかしくない清潔な町とするため、雁木の掃除や、便所の撤去が指示されたことが分る。

さらに、明治6年(1873)1月の『市中心得改定の伺』⁴⁷⁾には、

市中庇先ノ戸障子及庇内へ置台ヲ設ケ、売物等ヲ差置キ候儀、廃止スヘキ事

とあるように、雁木は、商品売買の場としても利用されていた。

同年3月4日の『新潟法令集』⁴⁸⁾の「定」には、

当市中一般軒下へ戸障子或ハ羽目板、壁等仕付ケ有之分、当月限り取払可申事

とあり、雁木の通路機能を確保するため、往来を妨げる囲い込みの撤去を指示した。また同定には、

物干之義ハ表通り店先キ又ハ表庇、屋根等ニテモ決テ不相成候事

とある。主屋屋根と表庇を区別した扱いから、明治6年(1873)にお

いて雁木の形式は、落し式であったことが分る。

また、明治6年(1873)4月12日の『違式隠違条例』⁴⁹⁾「違式罪目」第8条によると、雁木先への孫庇の設置も禁止された。『違式隠違条例』は、明治13年(1880)に、全県に施行された。

明治11年(1878)7月に新潟町を訪れた、イギリス人の女性旅行家、イサベラ・バードが著した『Unbeaten Tracks in Japan』(『日本の未踏の地』)⁵⁰⁾の挿し絵(図-5)には、町西端の西堀前通りにおいて、二階屋前面の、落し式雁木と造り込み式雁木が描かれている。

さらに、雁木通りについては、「奥深いベランダが街路に沿ってずらっと続いているので、冬になって雪が深く積ったときに、屋根のついた歩道の役目をするようになってい」⁵¹⁾とあり、さらに「この町では、(中略)ベランダの下をのろのろと歩く」⁵²⁾とあることから、雁木通りの通路機能が保たれていたことが分る。また、「町が改善さ

れたのも最近のことであり、図-5 明治11年(1878)の新潟の様相(模写)今では東京府知事になっている楠本正隆氏によって完成されたのはほんの近年のことである」とある。よって、明治11年(1878)までには、雁木通りも含めた都市整備が、完了していたものと考えられる。

その後、明治13年(1880)には、雁木の補修を、警察の管理下で実施する方針が変わった。明治13年(1880)2月20日の『新潟法令集』の「街路取締規則」第8条には、

屋上又ハ檐端等ニ載積スル物品ハ、墜落ノ防禦ヲ嚴シ、或ハ朽腐壞敗シタル檐・庇及ヒ垣牆若クハ瓦石ノ墜落セントスル危険ノ虞アルモノハ、速ニ修補又ハ改造スヘシ、尤モ巡查ノ注意ヲ怠慢ニ付スルモノハ、時機ニ寄り直ニ取除カシムルコトアルヘシ

とあり、壊れた雁木は、早速修理し、修理しない場合は撤去した。

さらに、明治15年(1882)2月13日の『新潟県違警罪』⁵¹⁾によれば、明治13年(1880)の『街路取締規則』に違反した者や、雁木において轢を引き、人々の往来を妨げる者は、厳罰に処した。『街路取締規則』ならびに『新潟県違警罪』は、新潟に限らず、全県に施行した。よって、雁木の補修や、人々の往来の確保は、全県を対象に徹底させようとする行政側の意図が窺える。

③雁木下の権利形態 『改革叢書』明治6年(1873)4月の「底下之地所取扱規則」の冒頭には、

当市街ノ地所公有私有之境界確定之儀、此程中及布告置候処、従前公地ニ取建有之建物取払候テハ難決之趣ニ有之、今般戸長用挂一同集議決定之上、底下往来地拝借之儀願出候ニ付聞届候条、庇修理并道普請等ノ儀、戸長用挂工取扱申付候、此段可相心得候事

とあり、「底下往来地(雁木下)」は公有地として認められながらも、その利用は届出の上で承認した。さらに、同規則には、

建家土台真中ヨリ一尺五寸ノ地ハ、従前之通人民ノ私有トス、其私有地ノ境ヨリ凡五尺通りヲ、併テ底下往来之地ト定ム、而シテ此往来ノ地所修理ノ費用トシテ、一坪ニ付金五拾銭宛ヲ取立、町会所ニ於テ修理方可取扱事

とあり、建物の土台の真ん中から1尺5寸の土地は私有地とし、その

私有地の境から、およそ五尺をあわせて「底下往来之地」と定め、その修理費用として1坪に付き、50銭がとりたてられた。これは、雁木下を、私有地と考える住民側の判断と、その公共性を確保するために公有地と考えたい行政側の判断の妥協が生み出した結果と考えられる。また、住人の雁木の修理費用の負担は、同規則⁵²⁾によれば、次の年から半減された。これは、雁木通りの維持管理に関する公共的性格を行政側が認めたためと考えられる。さらに、『新潟町諸施設の沿革』⁵³⁾の「市街道路」の項には、

六年四月市中一般二底ヲ修繕シ

とあり、雁木の修理のことが示され、さらに「底下之地所取扱規則」には、

底ハ新旧ヲ論セス、端口高サ凡七尺ト定メ、総テ一様ニ改造スベシ

とあり、雁木の高さを揃えることを、整備の一環とした。

同規則⁵⁴⁾によれば、雁木の修理は、戸長や用挂⁵⁵⁾の担当であることが再度確認された。

以上の規則は、権利関係・規模・修理の担当など、雁木通りの維持管理に関し、重要な点を網羅している。都市整備の早い時期に、雁木通りの政策について決定したいとする行政側の方針が窺え、雁木通りに関する処置は、都市整備における最も重要な課題の一つであった。

④雁木通りの様相 明治時代中頃の、町中心部の古町の古写真⁵⁶⁾(図-6)によれば、落し式雁木と造り込み式雁木が確認できる。

さらに、同年代の本町通りのはずれの古写真⁵⁷⁾によれば、石置板葺の、落し式雁木が設けられていた。さらに雁木先には、雨落が確認でき、雁木の前の道路上には、街灯が設けられていた。

⑤雁木通りの整備と撤去 明治時代初期から、雁木下については、さまざまな規制が行われたが、不統一であり、交通の上からも、景観の上からも問題が大きかった。そこで明治33年(1900)に、基準を設けて規制を行うべきであるとの建議を、当時の市会議長山崎利吉が、市長八木朋直に提出した⁵⁸⁾。同年8月の建議⁵⁹⁾には、

又世ノ開明ニ進ムニ從ヒ市街道路ノ規律ヲ正フスルハ勿論ナルニ、事実却テ乱雜ヲ来シ古来慣行アル雁木ヲ廃スルモノアリ、道路ヲ侵害シテ建物ヲ設クルアリ、其醜狀枚挙ニ遑アラス、是亦整理ノ規定ヲ設クル必要ヲ認メタルナリ

とあり、雁木を設けなかったり、町並みが見苦しかったことが分る。さらに同規則には、

従来設置シ来リタル雁木(庇)ノ儀ハ全市調査ノ上、今後尚必要ヲ認ムル場所ト不必要ノ場所トヲ区分シ(例セハ古町通何番町ヨリ何番町迄雁木必要、其他ハ不必要ト言フ如シ)、必要ノ場所中設ナキ所ハ其土地ノ所有者、若クハ地上権者ニ設置ヲ命シ、其成セサル時ハ市ニ於テ設置シ費用ヲ徴収スル事

図-6 明治時代中頃の古町

とあり、雁木の設置を土地の所有者に命じていることから、雁木は私有地に建設するものとされていたことが分る。よって、明治33年(1900)までには、雁木下は全て、私有地となったものと考えられる。

さらに、同建議によれば⁶⁰⁾、雁木が必要と定められた場所に建設されていた建物は、期限を定めて取り払うこととされた。さらに、不必要な場所の雁木は取り払うよう⁶¹⁾、行政上の方針が示された。

その後、明治41年(1908)の大火は、市街の雁木通りのほとんどを焼失させた⁶²⁾。時の県警察部長、依田銑次郎は、雁木撤廃をとえ、焼失から免れた雁木通りも、翌42年(1909)の「雁木取り壊し条令」により撤去された。同条令は、新築家に雁木を設けてはならず、また、既存の雁木は、2年以内に取り払えという内容であった⁶³⁾。

同条令の背景は、明治41年(1908)の大火の際、雁木下が延焼を早める原因になったからだとされる。この条令は、新潟県に対して施行されたが、その反響は、積雪量の多い新潟県の中・南部の雁木通りを有した市街地に大きく、条令反対運動や暫断運動などが起き、条令は徹底できなかった。新潟県津川町では、警官駐在所のある片側の町並みの一部に限って雁木が撤去され、全域に及んでいない⁶⁴⁾。また、新潟県安田町においては、同条令について、旗野・斉藤二大政敵を中心に、活発に議論が戦わされた⁶⁵⁾。雁木通りの存否が、極めて重要な問題であったことが分る。

さらに、この条例は、全县に対して施行されたものの、多くの町では、部分的な実施に止まり、完全に実施されたのは、新潟市のみであった。よって深雪地域の実状にあわないものと言え、住民も雁木通りの効果を十分に認識していたことが分る。

以上のように新潟においては、明治5年(1872)に雁木が公道と同等の通路機能が求められた。明治6年(1873)には、雁木に戸障子・羽目板・壁など私的な囲込が多く、売台が置かれるなど、住人により私的に利用されており、通路機能の確保を目的に、その撤去を行政が指示した。さらに、雁木下の権利形態が、私有地1尺5寸、公有地5尺と定められた。しかし、明治33年(1900)までには、雁木下は、全て私有地として追認された。

雁木の形式には、落し式と造り込み式が確認でき、明治6年(1873)においては、落し式雁木であった。その後、造り込み式雁木が建設されたのは、後年、雁木下が全て私有地とされたためと考えられる。

また、明治41年(1908)の大火により、市街の雁木通りのほとんどが焼失した。さらに、焼失から免れた雁木通りも、翌42年(1909)に施行された「雁木取り壊し条令」により撤去された。火災の際、雁木通りが延焼を早める原因になったためである。

5) 長岡における落し式雁木と造り込み式雁木

長岡は、明治21年(1888)の東山油田の開発や、明治31年(1898)の信越本線的全線開通により、中越の中心都市として発達した⁶⁶⁾。

①雁木下の権利形態 長岡の雁木通りは、近世において、表町では、元和3年(1617)～8年に私有地である屋敷地に建設された。

『延宝年中長岡町割絵図』⁶⁷⁾には、表町の道幅が7間、裏町が6間半とある。裏町では、元文4年(1739)に公儀地である道路上に建設され⁶⁸⁾、慶応年中(1865～67)の『長岡家中屋敷絵図』⁶⁹⁾においても、延宝期(1673～80)と比べ、道幅に変化はない。よって、表町・裏町の雁木下の権利形態は、建設当初と同様の状態で、明治を迎えたものと考えられる。

長岡の雁木通りは、明治元年(1868)から戦前まで私有地に建設さ

れていたとされる⁷⁰⁾。よって、近世において公儀地に設けられていた裏町の雁木下は、明治元年(1868)に私有地に取り込まれた。

②通路機能の確保 私有地である雁木下の土地は、課税の対象でありながら、私用のために遮断する場合は、警察の許可を必要とし、違反した場合は処罰された⁷¹⁾。また雁木下に店を開くことや、物を置き去りにすることは、交通妨害として禁じられた⁷²⁾。通路としての公共的性格を重視したためである。

③雁木通りの景観 長岡の雁木通りは、明治43年(1910)8月の、町西端の千手横町の古写真⁷³⁾(図-7)によれば、造り込み式雁木が確認でき、雁木の屋根は、石置板葺で、雁木先には小庇が設けられていた。

大正6年(1917)の千手横町の古写真⁷⁴⁾によれば、落し式雁木と造り込み式雁木が確認でき、雁木の屋根は、石置板葺と瓦葺が確認できる。同年の、町西端の山田町(千手横町の西側)の古写真⁷⁵⁾によれば、落し式雁木と造り込み式雁木が確認できる。

大正時代の、町西端の文治町(遊郭通り)の古写真⁷⁶⁾によれば、瓦葺の落し式雁木が設けられていた。

以上のように長岡においては、明治元年(1868)以来、雁木下は私有地であった。明治時代においては、造り込み式雁木が存在した。

その後、戦災(昭和20年 1945)により雁木通りが焼失したものの、戦災後の復興都市計画において雁木通りが新たに建設整備された。

昭和21年(1946)2月10日付「新潟日報」によれば、同年同月に開かれた都市計画協議会において、市は、住民の雁木下の課税免除の要求に応じ、①焼け跡の区画整理および道路計画の確立に当たっては、雁木は公有地(道路上)に建設してもらいたい。②私有地に雁木を建設する場合には、地租を免除してもらいたい、などの要望を提出した⁷⁷⁾。この協議会の決定内容については不明だが、市側も雁木下の課税免除に積極的であった。

昭和23年(1948)3月8日に開かれた、長岡復興建設部参与会においては、雁木は豪雪地としては是非必要であり、幅員8間(14m)以上の道路には、公道上に雁木通りを建設し、統一した景観を造るよう決定し実施された⁷⁸⁾。その後、昭和40年代以降、表町の雁木通りがアーケードに変容し、裏町の雁木通りの一部が撤去され、軒の出の浅い庇に変わった⁷⁹⁾。

6) 高田における落し式雁木と造り込み式雁木

高田は、明治維新後、特殊な産業もなく寂れたが、明治40年(1907)に第十三師団が誘致され、新潟・長野両県から多くの人々が集まり、市街は活気を取り戻した⁸⁰⁾。

①雁木下の権利形態と拡幅 雁木下は、幕末同様、私有地であった⁸¹⁾。維新後、雁木下の幅が2尺から4尺と狭い場合は、6尺に拡幅し

図-7 明治43年(1910)の千手横町

た。また落し式がハイカラとされ、本町通りを中心に普及した⁸²⁾。

しかし、明治42年(1909)の「雁木取り壊し条令」のため、明治43年(1910)2月に五分一(現在の栄町)に開設した遊郭には、雁木が設けられなかった⁸³⁾。

②雁木下の舗装と雁木通りの景観 大正元年(1911)には、雁木下の路面を舗装するように県条例が出され、本町通りにおいて実施された⁸⁴⁾。大正元年(1911)頃の写真⁸⁵⁾(図-8)によれば、落し式雁木と造り込み式雁木が確認できる。大正4年(1915)の本町2丁目の写真⁸⁶⁾によれば、落し式雁木であり、雁木の屋根は、鉄板葺と瓦葺が確認できる。また、同年の本町7丁目の写真⁸⁷⁾によれば、瓦葺の落し式雁木が設けられていた。大正初期の本町2丁目付近の写真⁸⁸⁾によれば、木羽葺の落し式雁木であり、雁木下は敷石で舗装されていた。大正6年(1917)の今和次郎『見聞野帖』⁸⁹⁾によれば、町東端の鍋屋町において、落し式雁木と造り込み式雁木が確認できる。さらに雁木の屋根は、落し式雁木では、主屋同様、石置の板葺であった。

つまり、大正時代においては、落し式雁木と造り込み式雁木が存在した。また雁木の屋根は、場末においては、石置板葺であり、町中心部の本町においては、瓦葺・鉄板葺・木羽葺が確認できる。

図-8 大正元年(1911)頃の様相

昭和8年(1933)の写真⁹⁰⁾によれば、鉄骨造の落し式雁木が設けられていた。昭和以降の写真⁹¹⁾によれば、雁木の屋根葺材は、瓦葺や鉄板葺が普及していた。

以上のように高田においては、維新後、雁木下は私有地であり、さらに、本町通りにおいては落し式雁木が普及し、町はずれには、造り込み式雁木が存在した。雁木下は、大正元年(1911)に本町通りにおいては、敷石で舗装された。さらに、昭和初期以降、雁木通りの一部に、バルコニーが設けられた。昭和40年代以降には、道路拡幅などにより、場末において、雁木通りの一部が撤去され、軒の出の浅い底に変わった。

7) 糸魚川における落し式雁木と造り込み式雁木

糸魚川は、大正元年(1912)12月16日に北陸線が開通し、市街は活気を取り戻した⁹²⁾。

①明治期の雁木の形式 明治11年(1878)の天皇巡幸取材した、新聞記者岸田吟香の記録⁹³⁾によれば、

ひさし上の屋根石二通りずつ取り払ひ

とある。「ひさし上の屋根石」とあることから、雁木の形式は落し式で、雁木の屋根は、石置板葺であった。

②大正期の雁木通りの景観 大正4年(1915)の大街通りの様相を古写真⁹⁴⁾にみると、雁木の形式は落し式であり、雁木の屋根は石置板葺と、瓦葺の両方が確認できる。さらに雁木下は、敷石によって舗装され、雁木先から少し離れた位置に溝が通っている。この溝は、雨水の排水に利用された。

大正6年(1917)の今和次郎『見聞野帖』⁹⁵⁾によれば、鉄砲町の長屋前面に設けられた、石置板葺の落し式雁木は、戸袋や建具が設

けられるなど、町家に取り込まれた。鉄砲町が町はずれであることから、人通りが少なかったためであろう。

さらに『見聞野帖』(図-9)には、町中の漁家の町家が4軒描かれている。いずれも妻入の二階屋前面に雁木が設けられており、落し式雁木の町家が2軒、造り込み式雁木の町家が2軒である。雁木の屋根はいずれも、主屋同様、石置板葺であり、雁木の前には、石積の水路が設けられていた。さらに、造り込み式雁木の前には、小庇が設けられていた。

以上のように糸魚川においては、明治11年(1878)に、石置板葺の、落し式雁木通りが設けられていた。大正時代には、落し式雁木と造り込み式雁木が存在した。その後、昭和40年代までには、道路拡幅により、大町・新屋町など町中心部において、雁木が撤去され、軒の出の浅い底に

図-9 漁家の雁木

Ⅲ. 近代における雁木通りの整備過程と衰退過程

近代における各都市の雁木通りの整備過程と衰退過程を、時間軸の上で検討する(表-1)。

①雁木通りの整備過程 近代に入り、底下は、地租改正などにより、全国的に公有地化する政策がとられた。たとえば、大阪では、道路境界の明確化を目的とした、明治4年(1871)の布達にはじまり、地租改正、地券発行などを経て、それまで占有化されていた底下(おたれ下)は、昭和15年(1940)までに公有地とされた⁹⁶⁾。つまり、政府は、近世において、当初公儀地であり、その後、屋敷地にとりこまれた底下を、近代以降、公有地として回復し、さらに公有地にはみ出して建てられていた家屋・庇などについては、いずれ公有地とする目的で、占有料や使用料を徴収した⁹⁷⁾。

雁木通りの整備過程を整理すると、次の4事例となる。

- ①近世において公儀地であるが、占有化されていた雁木通りは、明治初期において、便所や囲い込みの撤去が指示され、公有地として、本来の通路機能を回復した(弘前・青森)。
- ②近世において私有地であったために、占有化されていた雁木通りは、近代以降、行政により占有化が禁じられ、私有地にもかかわらず、本来の通路機能を回復した(長岡の表町)。また、明治初期において、雁木下が、私有地から公有地とされたことによりそれまで占有化されていた雁木の便所や囲い込みの撤去が指示され、本来の通路機能を回復した。その後雁木下は、私有地とされたが、通路機能は維持された場合がある(新潟)。雁木通りの公共的性格を、住民がある程度認めたためであろう。
- ③近世において公儀地であり、通路機能が保たれていた雁木通りは、明治元年(1868)に私有地となって以来、占有化の傾向が現れはじめた。しかし、行政により占有化は禁じられ、本来の通路機能を回復した(長岡の裏町)。
- ④幕末以来、屋敷地にとりこまれながらも、通路機能が保たれていた雁木通りは、明治期以降、私有地にもかかわらず、通路機能が維持された。これは、雁木通りの冬期における利便性を、住民が高く評価していたためと考えられる(高田)。

以上のように、雁木通りは、明治初期において占有化されていた場合には、通路機能の確保を目的とした整備が実施された。雁木下が、公道と同等の通路機能が求められたためである。

いっぽう長岡では、戦後、新たに雁木通りが再整備されたが、昭和40年代以降、雁木通りがアーケードに変容したり、雁木通りの一部が撤去され、軒の出の浅い底に変わった。

②雁木通りの衰退過程

雁木通りの衰退消滅の過程を整理すると、次の4事例となる。

- ①明治後期から大正期の大火により焼失し、雁木通りの一部が軒の出の浅い底に変わった(青森・八戸・新潟)。
- ②①の大火の後に撤された雁木撤去の条例により、防火の観点から撤去され、軒の出の浅い底に変わった(青森・新潟)。
- ③戦災により焼失し、軒の出の浅い底に変わった(青森)。
- ④戦後の都市計画による道路拡幅により衰退し、雁木通りの一部が、軒の出の浅い底に変わった(弘前・高田・糸魚川)。

以上のように、雁木通りは、明治後期から大正期では、防火の観点から、戦後では、道幅の拡幅により、衰退消滅した。これは、明治後期から大正期にかけては、防災都市の建設を目指し、戦後は、都市内交通を円滑にするために幅広の道路網を整備するなど、当時の都市整備の目的に対応したものである。

③雁木の形式 近代における雁木の形式は、落し式と造り込み式であり、弘前・青森・八戸・高田では、近世において建設されていた、落し式雁木ならびに造り込み式雁木の形式が、近代以降も継承された。また、秋田も同様の傾向であった⁹⁸⁾。

いっぽう、新潟・長岡・糸魚川では、近代に入り、造り込み式雁木が建設された。公有地に雁木が建設されていた弘前・青森では、造り込み式雁木が建設されなかったことから、新潟・長岡において、造り込み式雁木が建設されたのは、雁木下が私有地であったことに

対応したものと考えられる。

以上を踏まえ、雁木下の権利形態と雁木の形式を整理すると、次の2事例となる。

- ①雁木下が公有地→落し式雁木(弘前・青森)
- ②雁木下が私有地→造り込み式雁木(新潟・長岡・糸魚川)

近代において造り込み式雁木は、雁木下が私有地であった場合に限り、建設された。これは、雁木下が私有地であったため、落し式雁木の屋根上の占有化が可能であったためである。

IV. おわりに

雁木通りは、冬期間の歩行者用の通路機能の確保を目的とした、都市施設である。

近世において建設された雁木通りは、明治初期に、公道と同等の通路機能を求められ、整備された。よって近代以降も、雁木通りの通路機能が維持された。

雁木通りの整備過程は、明治初期において、公有地における雁木通りを整備し、本来の通路機能を回復した(弘前・青森・新潟)場合と、その後に私有地における雁木通りを整備し、通路機能を回復した(長岡の表町と裏町)場合がある。公有地における雁木通りの整備が、私有地に比べ早かったのは、公道と同等の通路機能が、私有地に比べ、逸早く求められたためである。

その後雁木通りは、明治後期から大正期の、大火や、大火後定められた雁木撤去の条例により衰退消滅し、さらに戦災や、戦後の都市計画にともなう道路拡幅により、衰退消滅した。

近代における雁木の形式には、落し式と造り込み式があり、近世以来の雁木の形式が継承された。いっぽう、近代に入り、雁木下が私有地であったことにともない、造り込み式雁木が建設された場合がある。

表-1 近代における雁木通りの整備過程と衰退過程

時代	明治					大正		昭和		
都市名	幕末	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1945	1955	1970
弘前	(落・公)									
青森	(落・公)							(戦災) 		
八戸	(落)									
新潟	(落)						(大火) 			
長岡	(落・私)表町 (落・公)裏町									
高田	(落/造・私)									
糸魚川	(落・私)									

凡 例 公…公有地 私…私有地 公/私…私有地1尺5寸, 公有地5尺

…落し式建木

…造り込み式建木

占有地

凡 例 公・公有地 私・私有地 公・私・私有地1尺5寸 公有地5尺 落し式雁木 造り込み式雁木 占有化

注)

- 1) 拙稿『近世における雁木通りの建設整備過程』日本建築学会計画系論文集 No. 494, 1997年4月。
- 2) 弘前・八戸・長岡・高田・糸魚川の近世における雁木通りの建設については、注1) 前掲論文参照。
新潟市は、『星島録記上』(新潟市史郷さん近世史部会『新潟市史 資料巻2 近世Ⅰ』新潟市, 1990年 所収)の近世後期の記録によれば、『厨子宛あるとき、底通りせんすせんすと呼あるとき』とある。苅森市は、明和3年(1766)1月の地図後の被官について、『蓮心寺旧記』に、『本家小見世沼 百八軒』(『苅森市史 第二巻 港町巻(上)』苅森市, 1956年 所収)。とあり、さらに、享和2年(1802)7月6日の『屋形楼苅森湍在中の諸注意』(『苅森市史 第八巻 資料巻(2)』苅森市, 1968年 所収)には、苅主が苅森を通行する際の町方への諸注意として、
上堤町より樽芳町、米町、同町六丁目小路より大町安方町、御飯屋小路より新町御飯屋の町において、
尤夜二入御通二而ハ見せ江灯を置、小見世燈籠的可申候
弘前・八戸・長岡・高田・糸魚川は、雁木通りが建設された代表的な城下町であり、新潟・苅森は、近代以降、雁木通りが積極的に整備された都市として知られる。
- 3) 此・杓・鹿・軒下・小見世・小店は、本文中で出典を示す。
- 4) 注1)前掲論文参照。
- 5) 原田伴彦・西川幸治『日本の市街古図【東日本巻】解説』鹿島研究所出版会, 1973年。
- 6). 7) 弘前市史郷さん委員会『弘前市史 明治・大正・昭和巻』(弘前市, 1964年)所収。
- 8) 注6)前掲。
- 9) 注6)前掲所収(撮影年代は不明)。
- 10) 師団将校には、家族とともに移り住む者が多かった。
- 11) 注6)前掲。
- 12) 注6)前掲所収。
- 13) 『苅森県弘前市備忘地図』(『絵図に見る弘前の町のうつりかわり』弘前市, 1984年 所収)。
- 14) 佐藤滋『城下町の近代都市づくり』鹿島出版会, 1995年。
- 15) 注5)前掲に示される。
- 16) 氏京武『日本における雁木通りの地理学的研究』私家版, 1976年に示される。
- 17) 財団法人文化財建造物保存技術協会『重要文化財 石場家住宅保存修理工事報告書』石場清勝, 1982年。
- 18) 日本地誌研究所『東北地方総覧 苅森県・岩手県・秋田県』二宮書店, 1975年。
- 19). 20) 苅森市史郷さん委員会『苅森市史 第六巻 政治巻』苅森市, 1961年。
- 21) 『村井旧記』(『苅森市議会史 資料巻』苅森市議会, 1986年 所収)。
明治期の都市生活に関する主要な史料が掲載されている。
- 22) 注21)前掲『村井旧記』。
当所の假、海陸便宜の地なるにより新たに当県を置かれ追々鉄道、伝信線等御設け人民便利の道を開きなされ候御趣旨につき
とあり、さらに、
元来東北の僻陬おのづから固陋の習風を免れず。(中略) 愚ろに愚民をさとして陋俗を洗脱せしむべし。
- 23) 倉倉弥八『160 ふるさとの想い出 写真集 明治 大正 昭和 苅森』(国書刊行会, 1980年)所収。
- 24) 『五月五日苅森町小下牛馬往來ノ儀ニ付布令候草』(『苅森県史(八)』歴史図書社, 1971年 所収)。
- 25) 尤右小店先へ暖簾障子ハ格別蒔絵簾等不掛ケサル様致シ努テ清涼ヲ旨可致候草
- 26) 『七月欠日當市中取締方之儀、是迄追々布令ニ及口候處、今般迄卒ヲ置キ、尚又取締致候ニ付、左之條々堅ク相守可申草』(注24)前掲『苅森県史(八)』所収)。
- 27) 『七月欠日般迄方心得左之通相定候草』(注24)前掲『苅森県史(八)』所収)。
第十五條 市中往來左右府ヨリ前へ底ヲ出ス者ハ寮主ヲ申付取紛ハセ可申草
- 28) 注23)前掲所収。
- 29) 注19)前掲に示される焼失地域図によれば、明治末期から大正初期にかけて雁木通りが建設されていた地域(注16)前掲に示される)のほとんどが焼失地域に含まれている。
- 30)～32)注19)前掲。
- 33) 大正初期の米町の古写真(注22)前掲所収)では、瓦葺の、落し式の小店が確認できることから、明治43年(1910)の大火後、復興されたことが分る。
- 34) 注16)前掲。
- 35) 注18)前掲。
- 36). 37) 中里造『121 ふるさとの想い出 写真集 明治 大正 昭和 八戸』(国書刊行会, 1980年)所収。
- 38) 高島成備・三浦忠司『南部八戸の城下町』伊吉書院, 1983年。
- 39). 40) 注36)前掲所収。
- 41) 注16)前掲。
- 42) 注5)前掲。
- 43) 新潟市史郷さん近代史部会『新潟市史 資料巻5 近代Ⅰ』(新潟市, 1990年)。
- 44) 『改革録』新潟市郷土資料館蔵。新潟市市史郷さん室にも複写したものが保管される。さらに注45)前掲『新潟市史 資料巻5 近代Ⅰ』にも抄録が掲載される。

本史料は、明治5年(1872)、6年に新潟町で行われた改革に関する違や記録など41項目を、明治10年代に新潟区の役人であった、早川清作がまとめたものである。

45) 注43)前掲。

46) 注44)前掲。

当港ハ北国第一之要地ニシテ開港場之一ニ當リ、内外之人民饑疫致シ候ニ付、一同仰ク朝廷外交際之御趣意ヲ奉体シ、競テ開化之域ニ至ルヲ希望とあり、さらに、

且又現今市街之有様、道路ハ勿論堀川ニ至迄一段二不潔汚穢ヲ極メ、其臭氣人生之健康ヲ妨害候のみナラズ、抑当港之體面無此上、實ニ可恥之甚歟ニ有之候

47) 『市中心得改定の伺』(注43)前掲『新潟市史 資料巻5 近代Ⅰ』所収)。

48) 『新潟市法令集』県立新潟図書館蔵。新潟市市史郷さん室にも複写したものが保管される。さらに注45)前掲『新潟市史 資料巻5 近代Ⅰ』にも一部所収される。

49) 『逓次館追察例』注44)前掲所収。

往來又ハ下外河中等工寮作、并ニ孫庇等ヲ自在ニ張出シ

50) イサベラ・バード『Unbeaten Tracks in Japan』(『日本の未踏の地』)

(高梨健吉訳『日本奥地紀行 東洋文庫240』平凡社, 1973年)。

51) 『新潟県違背罪』(注43)前掲『新潟市史 資料巻5 近代Ⅰ』所収)。

左ノ諸件ヲ犯シタルモノハ、一日以上十日以下ノ拘留、又ハ五圓以上十圓九拾五圓以下ノ科料ニ処セラレルヘシ

三、街路取締規則ニ違背シタル者

十一、櫛ヲ並ヘ章キ又ハ底下タ櫛ヲ章キ、行人ノ妨害ヲ為シタル者

52) 但、修理費用來年ヨリハ、一坪ニ付金貳拾五圓宛可取立草

53) 『新潟町諸施設の沿革』(年代は不明 注43)前掲『新潟市史 資料巻5 近代Ⅰ』所収)。

54) 底下往來地所拝借ノ儀頭出届候條、此旨可相心得候、尤底修理道造等戸長用挂

55) 町会所の役職。

56). 57) 新潟日報苅森社出版部『写真集 ふるさとの百年<新潟>』(新潟日報苅森社, 1980年)所収。

58) 新潟市史郷さん近代史部会『新潟市史 資料巻6 近代Ⅱ』(新潟市, 1993年)。

59) 『新潟市会館按鑑』新潟市郷土資料館蔵。注58)前掲『新潟市史 資料巻6 近代Ⅱ』にも一部所収される。

60) 注59)前掲。

前項雁木設置スヘキ場所ニ於テ建造物ヲ設ケ、其他現ニ使用シアルモノアラハ期限ヲ定メテ取払ハシメ、若シ取払ハサル時ハ市ニ於テ取払ヘ其費用ヲ徴取スル草

但シ取払迄ハ第三項ニ準シ使用料ヲ徴取スル草

61) 注59)前掲。

雁木必要ナキ場所ニ於テ雁木ヲ設ケアルモノハ期限ヲ定メテ取払ヲ命シ、若シ取払ハサル時ハ市ニ於テ取払ヘ其費用ヲ徴取スル草

但シ取払迄ハ第三項ニ準シ使用料ヲ徴取スル草

62) 注16)前掲。

63) 高田市史郷さん委員会『高田市史 第一巻』高田市役所, 1958年。

64) 注16)前掲。

65) 氏京武『わが国における“がんぎ(こみせ)通り”の地理学的研究(第5報)―消条都市について―』立正地理学会「地域研究」第14号, 1971年。

66) 日本地誌研究所『日本地誌 第9巻 中部地方総覧・新潟県』二宮書店, 1972年。

67) 『延宝年中長岡町割絵図』(『長岡市史双巻 NO. 22 長岡の地図』長岡市, 1991年 所収)。

68) 注1)前掲論文参照。

69) 『長岡家中原家絵図』(注67)前掲『長岡市史双巻 NO. 22 長岡の地図』所収)。

70)～72) 長岡市史郷さん委員会現代史部会『市史双巻 NO. 7 戦災都市の復興』長岡市, 1990年。

73)～76) 内山喜助『123 ふるさとの想い出 写真集 明治 大正 昭和 長岡』(国書刊行会, 1980年)所収。

77). 78) 注70)前掲。

79) 注16)前掲。

80) 注5)前掲。

81)～84) 注63)前掲。

85)～88) 新潟日報苅森社出版部『写真集 ふるさとの百年<上越>』(新潟日報苅森社, 1982年)所収。撮影場所は不明。

89) 『見聞野站』(『今和次郎・民家 見聞野站』柏倉房, 1986年 所収)。

90). 91) 注85)前掲所収。

92) 糸魚川市役所『糸魚川市史6』糸魚川市役所, 1984年。

93) 注92)前掲所収。

94) 下村省一・蛭子健治『目でみる上越・糸魚川の百年』(郷土出版社, 1992年)所収。

95) 注88)前掲。

96). 97) 石田領房『日本近代都市計画史研究』柏倉房, 1987年。

98) 文政年間(1818～1830)『秋田風俗絵巻』(秋田県立博物館蔵)には、二階屋前面の落し式の 小見世が確認でき、さらに明治30年代の『秋田風俗幻灯板』(秋田県立博物館蔵)には、同じく二階屋前面の落し式の小見世が町内に普及している様子が写されている。

(1997年7月10日原稿受理, 1997年11月5日採用決定)